

## 研究主題 「自信をもって情報や考えを表現できる生徒の育成

### ー単元のテーマに関連した英語の読書活動の充実を通してー」

東京都教職員研修センター研修部教育開発課

都立石神井高等学校 主任教諭 松井 聡美

#### 第1 研究のねらい

高等学校学習指導要領(平成30年3月告示)外国語の目標は「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を育成することを旨とする」と示されている。

しかし高等学校では、教科書で扱う内容の語彙や表現等が高度化し、その内容に関して伝えたい意見等を生徒に表現させることに課題がある。生徒の言語活動を活性化させるためには、アウトプット活動の時間を増やすとともに、インプット量を増やしていく必要がある。また、授業では教科書を使用した精読が中心であることも多く見られ、アウトプット(「話すこと」、「書くこと」)をするためのインプット量(「聞くこと」、「読むこと」)は、教科書の本文だけで充足しているとは言えない。

そこで、多量のインプットを確保する活動として、既に効果が実証されている「多読」に着目した。「多読」とは、文章の大意を把握する読書法であり、各自が興味、関心に合わせた本を選び、楽しんで読むことを目的とした学習法である。

本研究では、教科書単元のテーマに沿った内容の英語の本を、各自が興味・関心に合わせて選んで読む活動を課題として取り入れることで、語彙や表現の幅を広げ、授業内のアウトプット活動を活性化させる。(図1)このことを通じて、生徒たちが英語によるコミュニケーションの楽しさを感じ、自信をもって英語で情報や考えを表現できるようになることを目指す。

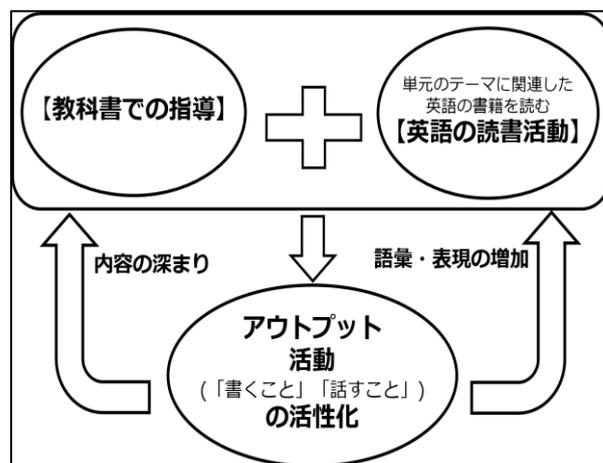


図1 教科書での指導と英語の読書活動を組み合わせた授業のイメージ

#### 第2 研究仮説

教科書単元のテーマに沿った内容の英語の読書活動を課題として取り入れることにより、語彙や表現の幅が広がり、生徒たちは自信をもって情報や考えを表現できるようになるだろう。

#### 第3 研究の方法と内容

##### 1 基礎研究

- (1) 国内及び海外における第二言語習得及び多読指導に関する文献調査を行い、多読が読解力や語彙力の向上に効果があることについて明らかにした。
- (2) C E F Rを参考にした到達目標、CAN-DOリストの分析を行い、共通尺度を導入した指導方法の効果について調査した。

## 2 調査研究

### (1) 調査の概要

令和3年7月に、都立高等学校第1学年1クラス38名を対象に、英語学習全般及び「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の項目別の意識調査を行った。

### (2) 調査結果

「より英語を話せるようになりたい。」という質問に対し、98%の生徒が肯定的な回答をした一方で、「話したい内容があっても、英語で表現できないことがある。」という質問に対し、当てはまる、またはやや当てはまると回答した生徒が95%であったことから、伝えたい意見を表現することに課題があることが分かった。(図2) 具体的な課題として、語彙や文法理解の不足を挙げている生徒が最も多かった。

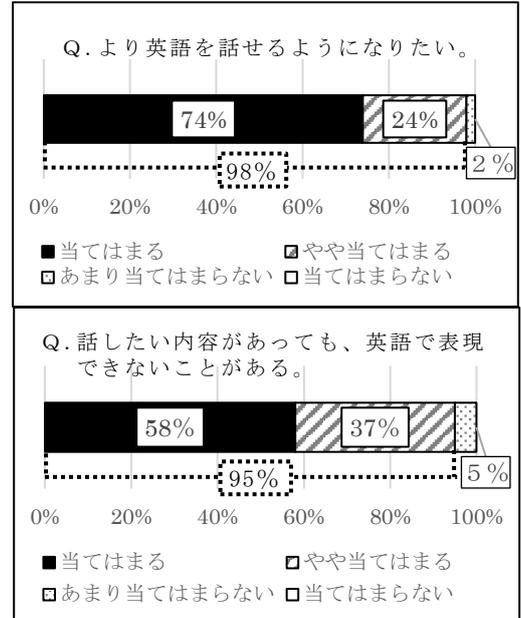


図2 英語学習に関する意識調査結果 (n=38)

## 3 開発研究

### (1) 教科書での指導と英語の読書活動を組み合わせた単元学習モデルの開発

教科書単元のテーマに合わせた英語の読書活動に、書いたり話したりする活動を結び付けることで、情報や考えを表現する力を高める授業モデルを開発した。(表1) 書籍は学校所蔵の図書を活用し、本の選び方や読み方について指導した。

表1 教科書での指導と英語の読書活動を組み合わせた授業モデル (ICTを活用した6時間の例)

	指導者の動き	生徒の活動	ICTを活用した指導
第1時	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書を用いた単元の導入</li> <li>レポートの説明</li> <li>自己評価シート(書くこと)の説明</li> <li>本の選択、読み方の指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本文全体の把握</li> <li>レポートのテーマに関する学習</li> <li>本の選択</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用した指導</li> <li>本の選択に関する質問の受付</li> <li>自己評価シート(書くこと)の配信</li> <li>レポートの添削及び返却</li> <li>自己評価シート(書くこと)の受領、フィードバック</li> <li>質問の受付、励まし</li> </ul>
第2時 ～ 第4時	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書を用いた4技能の指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教科書を用いた活動</li> <li>レポートの提出</li> <li>自己評価シート(書くこと)の提出</li> </ul>	
第5時	<ul style="list-style-type: none"> <li>プレゼンテーション作成の指導</li> <li>自己評価シート(話すこと[発表])の説明</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>レポートを基に、プレゼンテーション原稿の作成</li> <li>プレゼンテーションの練習</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己評価シート(話すこと[発表])の配信</li> <li>自己評価シート(話すこと[発表])のフィードバック</li> </ul>
第6時	<ul style="list-style-type: none"> <li>代表で発表したプレゼンテーションへのコメント</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>プレゼンテーション(グループ内、代表発表)</li> <li>自己評価シート(話すこと[発表])の提出</li> </ul>	

※下線部は英語の読書活動に関する内容

### (2) クラウド型グループウェア等のICT活用の工夫

個々の生徒の状況に応じたきめ細かな対応と学習の効率化を図るため、課題の提出と返却はクラウド型グループウェアを通して行い、自己評価シートはアンケート作成ツールを活用して作成した。

### (3) 生徒が適切な自己評価を行うための指導の工夫

表2 自己評価シート(書くこと)一部抜粋

	目標	評価基準	自己評価	評価
内容	物語の内容から、外国の文化と日本の文化を比較し、同じところや違うところについてとそれについての自分の考えを述べるができる。	a. 物語の内容を基にして、日本の文化と違うところや同じところと、それについての自分の考えを、考察とともに述べている。		
		b. 物語の内容を基にして、日本の文化と同じところや違うところと、それについての自分の考えを、具体的に述べている。		
		c. 物語の内容を基にして、日本の文化と違うところや同じところについて、または自分の考えについてのどちらか一方しか述べられていない。		
コメント				

表3 自己評価シート(話すこと [発表])一部抜粋

	目標	評価基準	自己評価
内容	選んだ本の要旨と日本文化との相違点について述べるができる。	a. 聞き手の反応を見ながら語彙や表現を変えるなどして、分かりやすく伝えている。	
		b. 使いたい語彙や表現を使用して、話して伝えている。	
		c. bを満たしていない。	
表現力	伝えたい相手を意識した話し方ができる。	a. アイコンタクトや話すスピードに留意し、聞き手を意識して話している。	
		b. 声の大きさに気を付けて、聞き手に分かりやすいように話している。	
		c. bを満たしていない。	
うまくできた点やできなかった点について書いてください。			

事前課題提出時とプレゼンテーション実施後に、「書くこと」(表2)、「話すこと[発表]」(表3)に焦点を当てた自己評価シートを作成した。それぞれの評価基準を設定し、事前に提示することにより、生徒が自ら課題を発見・改善できるようにした。

### 4 検証授業及び検証授業の分析

#### (1) 検証授業の概要

都立高等学校第1学年40名を対象に、令和3年10月5日(1回目)、11月25日、11月27日(2回目は1クラス2展開)に実施した。教科書単元のテーマに沿ってあらかじめ準備した英語で書かれた書籍の中から、各自の興味に合わせて選んだ本を読み、レポートにまとめた。作成したレポートを基に、授業内でプレゼンテーションを行った。(図3)

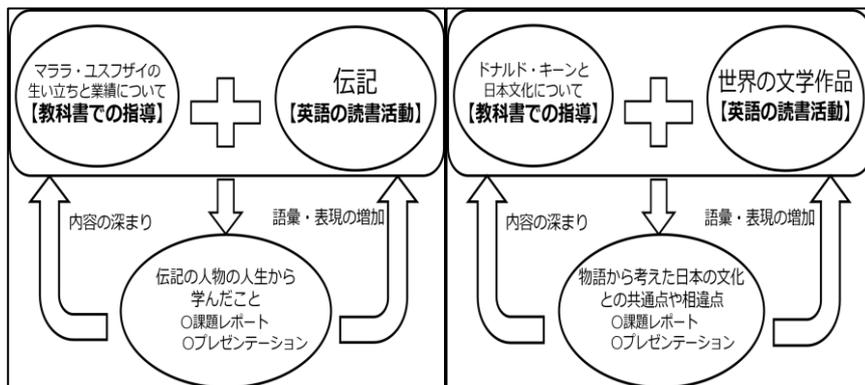


図3 検証授業の概要

各自の興味に合わせて選んだ本を読み、レポートにまとめた。作成したレポートを基に、授業内でプレゼンテーションを行った。(図3)

#### (2) 検証授業の分析

生徒の課題レポート分析及び検証授業1回目と2回目の後に意識調査を行った。

##### ア 教科書での指導と英語の読書活動を組み合わせた単元学習モデルの有効性について

授業の最後に、原稿を見ずに内容を要約した文の平均語数は、1回目43.7語、2回目53.6語であったことから、実際に使用できる語彙の量は増えていると考えられる。(表4)

また、1回目に and や but を繰り返していた生徒が、2回目には however や finally を使って文を展

表4 発表後に原稿を要約した文の平均語数

1回目	2回目
43.7語	53.6語

開するなど、多くの生徒の語彙の質も向上した。2回の検証授業後の意識調査を比較すると、「英語で文章を書きやすくなった。」に対して肯定的な回答をした生徒の割合が、1回目の63%から2回目は81%に増加した。また、「英語を話すことに自信がもてるようになった。」に対して肯定的な回答をした生徒が1回目の40%から2回目は53%に増加した。(図4) これらの結果から、語彙や表現の幅が広がり、英語を話すことに前向きに取り組めるようになったことが分かる。

#### イ ICT活用の工夫の有効性について

ICTの活用により、提出した生徒から添削し、すぐに返却できるなど、指導の大幅な効率化が図れた。また、生徒に直接連絡をして相談や質問を受けたり、褒めたり励ましたりすることができるなど、指導の個別化が図れた。

#### ウ 生徒が適切な自己評価を行うための指導の工夫の有効性について

あらかじめ提示された評価基準に基づいて自己評価を行うことにより、目標の達成度が明確になった。指導者の評価と生徒の自己評価はほぼ一致しており、生徒たちは正しく評価基準を理解し、自己評価できていたと考えられる。

#### エ 英語によるコミュニケーションに対する意識の変容について

1回目のプレゼンテーションでは、原稿を読んでいる生徒も多かったが、2回目では本を開いて挿絵を見せたり、ジェスチャーを交えて話したりする生徒の姿も見られるようになった。検証授業後の生徒の感想からも、英語を使うことに楽しさを感じ、英語を話すことに自信もてるようになった様子が確認できた。(表5)

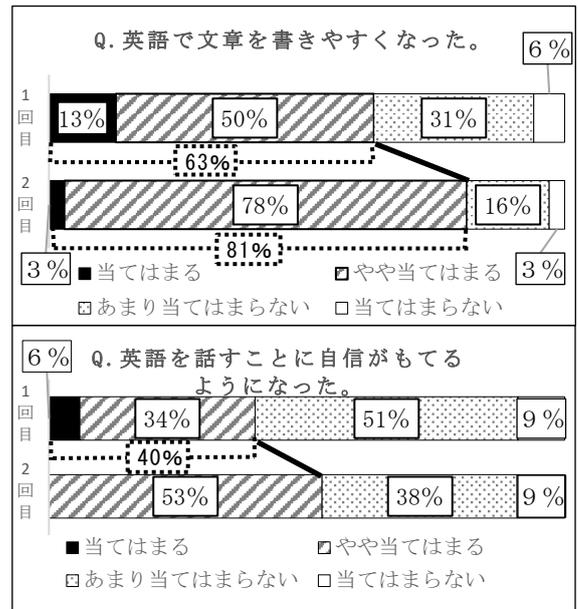


図4 検証授業後意識調査結果 (n=38)

表5 生徒の感想(一部抜粋)

- ・以前より英語で話すことに自信がもてるようになった。
- ・英語を使うことに楽しさを感じることができた。
- ・間違いを気にするといつまでも話すことができないと思った。
- ・普段自ら英語の文章を読まないのが良い機会になった。

### 第4 研究の成果

- ・教科書での指導と英語の読書活動を組み合わせることにより、語彙や表現の幅が広がり、アウトプット活動が充実した。
- ・アウトプット活動の充実により、自信をもって情報や考えを表現できる生徒が増加した。
- ・他の単元でも繰り返し取り組むことにより、アウトプット活動がより充実することが期待できる。

### 第5 今後の課題

- ・4技能5領域の活動をバランスよく取り入れ、発信力を更に強化すること。
- ・自己評価シートの分析から得た生徒の気付きの変化を、指導に生かしていくこと。
- ・オンラインで利用可能な電子書籍やAI校正ツールなど、ICTの活用による効率化を更に推し進めること。